

体験学習内容の類型および教育効果と山村留学 — 自然・社会・生活体験学習と環境教育の基礎形成 —

玉井 康之

北海道教育大学釧路校学校教育学教室

Role of "Learning by doing about nature, society and life" in the "Moving of children from urban school to rural school"

Yasuyuki TAMAI

Department of Sociology of Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

はじめに

子供の生活の近代化によって、様々な教育的な矛盾が生じている。一般的な生活の豊かさは、必ずしも子供の教育にとって、豊かである訳ではない。このような近代化の中での諸矛盾を克服するために、直接体験学習の重要性も徐々に認識されるようになってきている。しかし、この体験学習の意義は、これまで必ずしも、その認識形成における教育的な意義をとらえつつ、類型整理されている訳ではない。

このような体験の内容を考える上で、重要な示唆を与えてくれるのが山村留学である。山村留学は、農山村の中で子供達が過ごすために、農山村の自然や生活や地域の職業など、様々な体験を行っている。これらは、特に体験学習とはうたわなくとも、都市・市街地の生活環境や人間関係からすれば、農山村での生活そのものが体験学習なのである。

このような山村留学にともなう農山村の体験の意義に関して、これまで漠然とその良さが認められてきたが、その意義も必ずしも類型整理されている訳でもない。体験には、自然体験、社会体験、生活体験、をはじめ、さらにその中での各形態など、多種類の意義と内容を含んでいる。そして一つの企画は一つの意義のみしか含まないものではなく、複合的な意義を含んでいる。

子どもの現状からすると、とりわけ自然体験学習が不足している。なぜなら、1983年のファミコンゲームの出来により、子供達の人間関係や遊び方が決定的に変化してきたからである。またすでに高度経済成長以降に幼少年期を過ごした親達が大半を占めてきたため、現代の子供達に伝えなければならない親達自身が、自然や遊びや生活の体験

を伝えられないでいるからである。そしてこのような、体験活動の欠如の下で、集団で生きていくことの知恵や基礎的知識を得られないまま、幼少期から青年期を過ごしているのである。

むろん、この山村留学による体験学習の意義は、単に自然体験学習に留まるものではなく、社会体験や生活体験およびそれらを基盤にした人間関係づくりの体験を含むものである。近年少年の凶悪犯罪が年2千件(1997年)、校内暴力も年1万件を突破し、さらにそれらが増え続けている現状の中では、親密な人間関係・信頼関係の形成も大きな課題となっている。1997年の神戸の中学生による児童惨殺事件以降、政策的な課題ともなっている「心の教育」も、結局は人間的な信頼関係を取り結ぶ体験の欠如に起因しているものである。そしてその原因は、旧来自然発生的に行われていた、集団的で創造的な遊びや労働の体験不足によるものである。

このような中で本稿の課題は、体験活動の基礎的意味を踏まえながら、自然体験を含めた山村留学の体験学習内容を類型化し、それぞれの体験学習の教育効果をとらえることである。そのため、第一節では、体験活動一般が認識を深める上で効果的である心理的な理由をとらえる。第二節では、体験学習をさらに意義内容から、自然・社会・生活の三つに分類し、それぞれの教育的意義をとらえる。第三節では、自然体験・社会体験・生活体験のそれぞれに関わる、山村留学の具体的な体験企画・行事等の内容をとり上げていく。

1. 体験活動の教育効果に果たす心理的意味

1. 子供の好奇心・探求心と体験活動

子供が大人と比べて本来的に持つ特性としては、好奇心・探求心が非常に旺盛であるということである。この好奇心・探求心が自ら「試してみよう」「やってみよう」とする体験学習の基礎となる。自ら為すことによって、主体性や行動力や創造力や忍耐力を形成していくのである。すなわち、好奇心・探求心は、体験学習の基礎を為しつつ、逆に体験学習によって、好奇心・探求心をいっそう高めていくのである。

子供が、好奇心・探求心が旺盛になる理由は、第一に、子供は、自分には見えない未知の世界を垣間みようとする気持ちが強いということである。それは大人でも、見えなかった部分が見えた時には、喜びを感じるものであるが、子供はそもそも見えない部分が多いために、常に知らないことを知ったときの喜びは連続的に生じているのである。そして、この発見の喜びを促すことによって、また好奇心・探求心をいっそう伸ばすことができるのである。

第二に、子供は、意外性に感動する傾向が強いということである。自然など、変化するものや、未知のもの予想との食い違いに興味を覚えるのである。これは、食い違うことによって、新たな創造力をかき立てるものであり、予想との相違は創造力の養成と表裏の関係にあるのである。

第三に、子供は、秘密性に魅力を感じる傾向が強いということである。かくれんぼなどは、原初的な秘密性を用いた遊びであり、秘密基地などによって、大人の入りえない小社会を形成している。大人の知らない世界を持つときに、大人からの自立を意識し始めるのである。

第四に、子供は、体を動かすことで満足感を得る傾向が強いということである。とりわけ、小学校高学年は、急速に身体が成長している時であり、たとえ身体訓練を施さなくとも、体力・能力が急速に向上している時期である。したがって、何をやっても以前よりも体力・能力の成長を実感できる時期であり、体を動かすことが面白く感じるのである。

これらの好奇心・探求心を発揮する過程を通じて、行動の主体者であることを実感するとともに、自分が何を知って何を知らないか、何ができて何ができないかを認識していくのである。

2. 体験活動と実態認識の心理的・基礎的意味

人間は、物的世界の知識に関しては、知覚対象を媒介にして獲得されている。例えば、まだ見たことのない宇宙人を創造できるかといえば、各自想像する実態は全くばらばらであろう。しかし、「宇宙人はタコのようなものだ」と

か、「クモのようなものだ」といった解説が加えられれば、各自でタコやクモを思い浮かべながら、さらにそれを膨らます形で想像することができる。逆にタコやクモを全く見たことがなければ、宇宙人も全く想像することはできない。すなわち、ある特定の前提的な認識があるからこそ、現実的・科学的な創造力を働かすことができるのであって、知覚的な体験をまったく抜きにして、現実的・科学的な創造力を働かすことはできないのである。このように、言語的な認識の基礎には、実体的な認識があり、それがなければ、言語的に表現されていたとしても、当人は実はよく分かっていないのである。

言語は、そもそも実態の特定部分を表現したものすぎない。実態を言語化する過程では、共通の及び典型的な部分を抜き出す「抽象」と、共通ではなく瑣末な部分を切り捨てる「捨象」の両方を、同時に行っている。したがって、言語に示された場合には、まるごとの実態ではなくなるのである。

したがって、本来抽象的な思考が可能になる人は、具体的な体験を多く伴った人である。多くの体験を伴えば伴うほど、普遍化し、抽象的に思考しやすくなるのである。とりわけ社会的・自然的体験の浅い子供の場合は、言語のみによる教育では実感としてその意味をつかみきれず、また記憶や心にも残らない。主体的で総合的な認識を得るためには、感覚的ではあっても、まず実際の体験や感覚的な認知が、認識の基盤として不可欠なのである。したがって、学校教育でしばしば行われてきた詰め込み教育は、長期的な認識の向上としては、必ずしも定着しえないのである。

II. 体験学習の意義内容の類型と教育効果

1. 体験の基本類型

体験活動をその意義内容から大きく分類してみると、1) 自然体験学習、2) 社会体験学習、3) 生活体験学習がある。さらに、社会体験学習の中には、勤労体験学習とボランティアなどを含む社会体験学習に分けられる。

これらの体験学習は、いずれも人間関係の密接な関り方を含む集団体験を含むものである。また体験学習は、内容によっては、それぞれの意義を複合的に含むものであり、特定の意義だけに限定できるものではない。実践的にはこれらの複合的な教育効果を目指しながら、体験の企画を立てていくのが普通である。総合的な性格を含んでいることが、実体験の特性でもあるからである。

山村留学においては、自然・社会・生活のそれぞれの体

験学習を、最も展開しうる条件を持っており、また実際に、意識的なカリキュラムを追及している学校が多い。以下自然体験、社会体験、生活体験のそれぞれの特性と教育効果について、とらえておきたい。

2. 自然体験学習の教育効果

自然体験学習は、活動内容が自然と関わるものであり、子供にとって最も興味を引く体験である。近年の子供を取り巻く自然環境は乏しく、意識的に自然体験を追及しなければ、それらを日常的に体験することはできない。

勤労体験学習と比較すると、相対的に、自然体験学習は、各自の自然観察・発見能力や、自然に関わる主体的・自律的な行動に重点がおかれ、大人社会の規範や指示に慣れることが目的ではない。したがって、自然の知識そのものの獲得よりも、子供の「気づき」「発見」のプロセスが重視される。

そのため自然体験学習は、同じ場所にいながら、対象・観点・内容の異なる学習課題を立てることが可能である。例えば、一つの黄色い花をとらえても、花の名前・分類に興味を持つ人、黄色の絵の具の作り方をとらえる人、たんぼなどの同じ黄色の花を持つ植物との生態比較に興味を持つ人など、多様な観点で発見課題を設定することができる。その結果、自分の問題意識で自らの力量を発揮できるとともに、指導者が意図しないような到達点を築くこともできる。一人一人が発見したことは、それが小さくとも独自の認識のプロセスを経過するために、自尊心や自己存在感を形成することが可能となるのである。このような自尊心・自己存在感の形成は、しばしば栽培療法や動物飼育療法にも使われ、人間性回復の一つの手段にもなっている。

現実の自然を体験的にとらえる意味は、第一に、自然の総合的な生態系をとらえることができることである。例えば、メダカの学習であれば、系統学習のように、メダカの餌や生息地や泳ぎ方やオス・メスの違いなどを一つ一つ教えるのではなく、それらを自然な生態全体の中から特性をとらえることができるということである。

第二の意味は、原生的な自然の中での、生き物の生きるための営みや生命の重みをとらえることができることである。すなわち、水槽や温室などの特定条件の中で生かされるのではなく、動植物は自然的な悪条件をはね返しながら生きていることをとらえることによって、命の重みをとらえることができる。

第三の意味は、自然の変化のもつ意外性をとらえること

ができることである。自然は、四季を通じて変化し、多様な側面を見せてくれる。何も刺激がないように見える自然も細かい観察をすることによって、思わぬ変化を発見することができる。

第四の意味は、社会体験とも重なるが、自然を発見する際に不可欠の、子供どうしの活動の協力を感ずることである。その際に、「協力」を強制しなくとも、体験活動自体が楽しければ、自然に協力関係や協力意識・仲間意識は生まれてくるのである。

3. 社会体験学習の教育効果

社会体験学習は、現代の知識偏重の学校教育体系の中で、知識と労働、および知識と生活が分離してきたことをかんがみ、物を作ったり、手足を動かしながら学習を進め、それを通じて社会に貢献することを体験するものである。この社会体験学習は、自然体験学習が気づき・発見を重視するのに比して、相対的にはあるが、特定の社会的規範・価値にしたがって目的的に行動することも求められる。

社会体験学習の意味を三つに大別すると、第一に、労働体験を通じて原形的な労働の意味を理解するということである。これは、物の製作や動植物の飼育・栽培をはじめ生産活動に関わる個々の労働の実践方法を体験的に獲得することを通じて、労働が持つ創作・創造的な意味を理解するのである。例えば、田植えや芋掘りや動物の飼育を行いつつ、手足や五感を駆使して、当該労働そのものの意味を学んでいくのである。この労働体験は、労働の役割を理解することが目的であって、特定の職業の技能を身に付ける職業教育とは区別される。

第二の意味は、地域の生産労働体験を通じて、地域理解や親への尊敬につながることである。例えば、いつも食卓で見ている農産物と農林漁業とが結びつくような地域農林漁業体験を行えば、何気なく見たり食べたりしている物の奥の深さを実感することができる。地域の中小企業での生産労働体験によって、それらの生産物が身近な生活に役立つことを体験するときも同様である。これらの地域産業が自分や友人の親の職業である場合には、いっそう体験を身近なものにし、地域理解を容易にする。ただし、地域や子供の身近な問題につながらない体験や中途半端な産業体験の強制は、子供の正しい勤労観や当該職業への認識につながらない場合があることも踏まえておかなければならない。

第三の意味は、社会福祉施設・公共施設でのボランティアや勤労を通じて、社会的・公共的な奉仕活動の重要性を

認識するという意味である。例えば、社会福祉施設への奉仕活動、公共施設への協力・奉仕、町内美化等の奉仕、などである。これらは、公共的な活動や弱者に対する奉仕活動を惜しまない心を養うことを目的とするものである。

これらの労働や奉仕活動を通じて、社会の厳しさと相互協力関係を学んでいくのである。農山村の学校では、日常的に地域の社会福祉施設・公共施設の活動や行事と結びついているところが多い。

4. 生活体験学習の教育効果

生活体験学習は、まず生活的な自立を目指すものである。自立の最も最初の形態は、身近な身の回りのことが、自分でできるということである。通常子供は、親の保護の下に生活しており、近年の少子化の中では、過保護性はいっそう強くなっている。また電気・電子器具や家具が普及している通常の生活においては、火を付けたり、簡単な料理を作ったり、寝床を敷くことさえもしなくなっている。このような生活に慣れた子供は、自分で自分のことをこなす生活能力を失ってだけでなく、自分で努力する代わりに親や大人にやってもらうことが当たり前価値観になってくる。

このような生活環境であるからこそ、親元を離れて生活させてみるとか、社会生活に必要な常識を日常的に自分でやらしてみるなどの指導は不可欠となってくる。この生活能力向上に向けた典型的な取り組みが、林間学校や臨海学習などの集団宿泊活動である。この集団宿泊活動では、自然体験活動と組み合わせながら、料理づくりや、キャンプファイヤーなどを通じて、原体験的な生活能力を養っている。農山村では、お金をかけて遠方に出かけなくとも、校庭でテントを張り、キャンプを行っているところも多い。

このような寝食を共にする生活の中から、日ごろ話をしていなかった人と話すことができたり、友人の別の側面を見ることができるなど、人間関係が新たに広がってくる。

生活体験学習の内容としては、早朝から就寝までの生活規律、料理やお菓子づくり、片づけ・掃除・洗濯、ボタン付けなど簡単な裁縫、ナイフや金づちなどの小道具の使い方、廃品回収やリサイクル、生活用品づくり、集団レクリエーション方法、芸能・文化活動、行事企画の方法、定例会などの討論方法、防災・交通安全、などがある。これらの企画内容は集団宿泊活動当日やその事前準備の中に入れたり、また日常生活の取り組みとして行ったりしている。生活の能力は、通常学校で一つ一つ習うものではないが、それぞれが日常生活の中で必要な能力ばかりである。これ

らの生活に不可欠な一つ一つの能力は、いわゆる「勉強」ではないが、これらが自分でできるかどうかによって、学校内外での「生きる力」の有無も決まってくるのである。

以上のような、自然体験学習、社会体験学習、生活体験学習の三つの意義内容のそれぞれの教育的な意義をとらえてきたが、これらは実際の体験学習の中では複合的に入り込むものであって、行事・企画ごとに意義を分けることはできない。例えば、勤労体験学習の一環として稲刈りを行えば、稲の穂つきや生態等に関する自然体験も含まれるし、地域への奉仕としての社会体験も含まれるし、また稲→玄米→米の食品問題として、生活体験も含まれるのである。そのため、以下は、おおむね三つの体験学習の分類にそいながら、山村留学で主に行われている企画内容を分類しておきたい。

III. 山村留学の体験学習の企画内容と類型

以上のような体験学習の意義はいずれも、山村留学制度の中に含まれているものである。したがって実際の山村留学の企画や体験内容を分類することによって、今後学校教育に一般的に求められる企画・体験内容をとらえることができる。すでに述べたように、自然体験学習（注1）、社会体験学習、生活体験学習の三つの体験の意義の類型は、企画や体験内容によって、複合的な内容を含んでいる。それぞれが独立的にとらえられるものではないが、便宜的にこの三つの分類にしたがって、体験に関する具体的な行事・企画の内容の列挙と分類を行っておきたい。

1. 山村留学における自然体験学習の内容と分類

1) 大動物体験

- ・乗馬などの動物との体験
- ・乳牛・肉牛の世話体験

2) 小動物体験

- ・うさぎ・鶏等動物飼育体験
- ・野鳥観察
- ・川釣り・海釣り体験
- ・蛙の卵や昆虫取り・観察

3) 植物体験

- ・山菜・キノコ取り体験
- ・高山植物体験

4) 水と氷の体験

- ・カヌー・イカダなどの水辺自然体験
- ・氷雪・御神渡り等の氷体験

- ・ 沢水飲用体験
- 5) 山と空の体験
 - ・ 登山体験
 - ・ 岩石・地層体験
 - ・ 星の観察体験
 - ・ 天気の予報体験
 - ・ 気球体験
 - ・ 日の出・日の入り体験
- 6) 自然と生活する体験
 - ・ キャンプ・テント体験
 - ・ 飯ごうなどの屋外料理体験
 - ・ スキー・スケート・ソリ等冬季スポーツ体験
 - ・ 木登り・森林浴等の森林体験

2. 山村留学における社会体験学習の内容と分類

- 1) 道具・ものづくり体験
 - ・ 道具作り体験
 - ・ わら細工・竹細工づくり体験
 - ・ 太鼓等伝統楽器づくり体験
 - ・ 陶芸体験
 - ・ 火おこし体験
- 2) 農業体験
 - ・ 田植え・稲刈り・脱穀等稲作体験
 - ・ 野菜や芋等の畑作業体験
 - ・ 酪農業体験・搾乳体験
 - ・ キノコ等の植菌体験
 - ・ 綿羊・羊毛体験
- 3) 林産業体験
 - ・ 炭焼き・木炭製造等の体験
 - ・ イスや家具づくり等の木工体験
 - ・ 小屋・家づくり体験
- 4) 漁業体験
 - ・ 漁船・地引き網体験
 - ・ 鮭の遡上・産卵・孵化等の体験
 - ・ アサリ・シジミ等の貝収集体験
 - ・ 稚魚放流体験
- 5) 福祉・公共ボランティア体験
 - ・ 地域の老人との交流
 - ・ 老人・障害者への訪問・介護手伝い体験
 - ・ 雪下ろし・家事手伝い体験
 - ・ まちづくり参画体験

3. 山村留学における生活体験学習の内容と分類

- 1) 伝統食文化体験
 - ・ みそ・納豆づくり体験
 - ・ もちづくり体験
 - ・ 蕎麦うち体験
 - ・ 煎餅・団子・おやき等伝統お菓子づくり体験
 - ・ 山菜や漬物体験
- 2) 地域伝統文化体験
 - ・ 太鼓・民謡・民舞等伝統芸能体験
 - ・ ふるさと祭りや収穫祭の体験
 - ・ どんど焼き体験
 - ・ 「ふるさと学習」等の地域発見学習の体験
- 3) 農村生活体験
 - ・ 大家族体験
 - ・ 農家家事手伝い体験
- 4) 料理体験
 - ・ 包丁・ナイフ体験
 - ・ 魚焼き・みそ汁など簡単な料理づくり体験
 - ・ 火の体験
- 5) 環境保全のための生活体験
 - ・ 温度切り下げ等の省エネ体験
 - ・ リサイクル体験
 - ・ ごみの分別体験
 - ・ 環境や地域美化体験
 - ・ 紙すき・紙づくり体験
 - ・ 裸足・素手体験
 - ・ 物都お金不足我慢体験
- 6) 体力づくり体験
 - ・ 長距離歩行・マラソン・競歩体験
 - ・ 自転車体験
 - ・ アスレチック体験
- 7) 生活習慣体験
 - ・ 起床から就寝までの規則的な生活体験
 - ・ ハシの持ち方や食事のマナー体験
 - ・ 身の回りの掃除・整頓の体験
- 8) 小規模集団体験
 - ・ 一人ひとりが注目される体験
 - ・ 日常挨拶等対人マナーの体験
 - ・ 異年齢集団・複式学級・縦割り班体験
 - ・ 全校学習の体験
 - ・ 人間的集団生活体験(会話・意見主張・妥協・調整等)
 - ・ 思いやりの体験
- 9) 地域行事体験

- ・運動会や文化祭など地域と一体となった学校行事体験
- ・地域カルタ大会や村民スポーツ大会等の地域行事参加体験
- ・親子の交流行事体験（スポーツ・自然探索・農作業等）

以上のように、山村留学の体験学習の内容を自然体験・社会体験・生活体験に便宜上分類しつつ、各体験学習内容をとらえてきた。

体験学習の内容には、多種多様な種類がある。これらは、必ずしも学校教育で教えている訳ではなく、地域や農家家庭や社会教育を含めてとりくまれているものである。逆に言えば、山村留学の体験内容は、学校教育・家庭教育・地域教育・社会教育のすべてによって、総合的に担われているものであって、学校・家庭・地域・社会を切り離してとらえることはできない。体験の学習自体が、複合的意味を持っているだけでなく、担われる主体も複合的なのである。

おわりに

以上のように、山村留学の体験学習内容を、自然・社会・生活の三つの観点から類型化し、それぞれの教育的意義をとらえてきた。これらは、系統知識や単元授業内における到達度評価のように、教える内容と学んだ内容の間に直線的な因果関係が認められる訳ではない。しかし、直線的な因果関係が認められないからといって、教育効果がないというのではない。すでに述べたように、科学的な創造力の基礎には、必ず現実の知覚体験が基礎となっており、自

然・社会・生活にまたがる体験係にしか教育効果を求めないのは、極めて狭い「学力」観が、認識形成の重要な媒体となっている。直線的な因果関であると言えよう。

これらの体験が基礎となって、人間的な信頼感や協調性、忍耐力、工夫する力や創造力、親や他人からの自立心・独立心、行動力、生活能力、など、人間的な基礎的能力を養い、さらにそれらが基本となって、観察能力や科学的な認識能力の基礎を形成していくのである。したがって、自然・社会・生活に関する体験活動を幼少期にどれだけ得られるかが、長期的な認識能力の向上や「生きる力」の基礎を形成していくのである。

これらの体験は、単に学校が提供する物だけではない。家庭や地域や社会教育などが相互に絡み合って提供されているものである。さらには、環境そのものが有する無意図的な体験内容とその教育力を多いに含んでいるのである。したがって、山村留学の自然・社会・生活にかかわる体験活動内容は、学校と地域と家庭と教育行政が連携されて初めて、より良く展開しうるものと言えよう。

註記

註1 山村留学の自然体験の企画内容としては、育てる会が高い水準を示している。育てる会の具体的な体験内容に関しては、財団法人育てる会の月刊雑誌『育てる』各月号が、参考になる。

付記 なお、農山村における学校と地域とのつながりの教育的な模倣効果や役割については、玉井康之著『北海道の学校と地域社会－農村小規模校の学校開放と地域教育構造－』1996年、東洋館出版、を参照されたい。